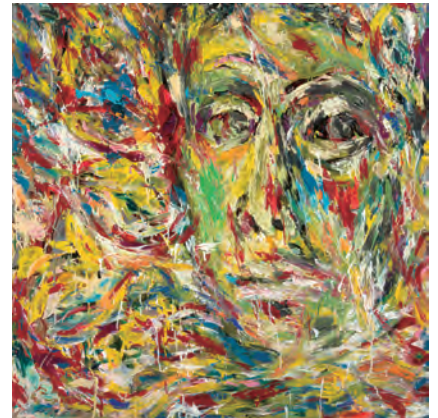


兵庫県政 150 周年記念事業

画家の肖像—横尾忠則の場合

5月26日（土）— 8月26日（日）

1970年代から若者のカリスマ的な存在となり、そのイメージがメディアを通して拡散されていた横尾にとって、主観と客観が混在する自身の肖像は特別なテーマでした。画家転向後、自身の内面を追求していた1980年代の自画像、モチーフとして客観的に自身を取り入れる1990年代、少年期の記憶から自身を見つめる2000年代の作品など、横尾自身の肖像を通して作品の変遷を探ります。また、第二部では、画家としての生き方を模索する横尾が影響を受けた画家の肖像や模写作品を展示します。



《自画像》
1983年

兵庫県政 150 周年記念事業

横尾忠則 自画自賛展

9月15日（土）— 12月24日（月・振休）

横尾忠則自身が自らの個展をキュレーションするという、公立美術館では初めての企画。横尾の作品は極めて自己言及的であり、多くの作品がとりわけ幼少期の記憶や体験と密接に結びついているのはよく知られています。ある意味で、彼は自らを見つめることを通して、世界と関わり続けてきたといえるでしょう。このたび、横尾がそれらの作品を独自の視点で選択し、ひとつの展覧会をつくりあげます。それは、また新たな次元で横尾が自身と向き合う営為に他なりません。そこには、いったい何が立ち現れるのでしょうか？ 現役アーティストの個人美術館にしかできない野心的な試みに、ぜひご期待ください。



《美の盗賊》
2008年

横尾忠則 大公開制作劇場

～本日、美術館で事件を起こす

2019年1月26日（土）— 5月6日（月・振休）

画家宣言以降、横尾忠則は多くの美術館で公開制作を行ってきました。観客の存在を前提とする公開制作は、横尾にとって一種の演劇的空間であり、「描く」という行為を再認識させる重要な制作手段の一つです。本展では、これまでに横尾が行ってきた公開制作を、作品及び写真・映像などのドキュメントによって再構築し、その現場を浮かび上がらせます。また、本展にあわせて公開制作を行い、展覧会会期中に現在進行形で変化する制作の軌跡を展示します。



《(N.P.)》
2012年